

インタビュー



う か じ た か し
宇 梶 剛 士 さん

俳優、劇団PATHOS PACK主宰、民族共生象徴空間
 (ウポポイ) PRアンバサダー

日本の先住民族であるアイヌの人々。しかし、江戸時代の松前藩による支配や、明治維新以降の「北海道開拓」の過程で、アイヌ民族独自の風習の禁止や日本語の使用の強制など、大々的な同化政策が行われ、1899（明治32）年に「北海道旧土人法」制定以降、国の政策によりアイヌ固有の文化は約100年に渡り否定され続けました。今回、自らのルーツであるアイヌとして、多方面で活躍する宇梶剛士さんにお話を伺いました。

（インタビューア：町 亞聖（まち あせい）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者、キャスターを経て、フリーに。医療と介護を生涯のテーマに取材、啓発活動が続けている。）

町 宇梶さんが作・演出を務めた舞台『永遠ノ矢トワノアイ』*1の劇場版が昨年公開されました。都会で生まれ育ったアイヌの若者の葛藤を描いた「現代」と言葉や文化を奪われアイヌとして生きることを禁じられた「過去」が交錯する物語ですが、アイヌを取り上げた作品をいつかは作ろうと構想は練っていたのでしょうか。

宇梶 『永遠ノ矢』は31作目の作品です。実は、以前にアイヌの長老が出てくる芝居を作ったのですが、その時にアイヌの文様の扱いが少しぞんざいになってしまい、幼い頃から知り合いのウタリ（アイヌ語で「同胞」）のお姉さんから「とても悲しい寂しい」と言われたことがあります。アイヌの着物の柄は、海の近くだと青が基調になっていたり地域によって少しずつ異なります。アイヌ文化では森羅万象にカムイ（神）が宿るといわれていて、自然の恵みはカムイからの贈り物であり大切にしなければならぬもの。自分には人権活動家ではありませんが、子どもの頃からアイヌが受けてきた偏見や差別による哀しい歴史を見聞きしていたので、何かを描くことによって人を悲しませたという事実を愕然としました。精神的

人として、アイヌとして
 人の痛みを知り、共に生きる



宇梶 剛士 さん

『半沢直樹』『軍師官兵衛』『逃げるは恥だが役に立つ』などのテレビドラマをはじめ、『20世紀少年』『キングダム』などの映画、CMなどに多数出演。2007（平成19）年に友人2人と共に劇団「PATHOS PACK」*2を旗揚げし、脚本・演出も務める。2020（令和2）年には、アイヌ文化の復興・創造等の拠点「民族共生象徴空間（ウポポイ）」のPRアンバサダーに就任するなど多方面で活躍している。

に大きな挫折を経験し、アイヌのことは自分の中で触れてはいけない感じになってしまいました。

●実話を基に舞台化

町 そうだったんですね。今回、舞台化を決めたきっかけはあったのでしょうか。

宇梶 劇団「PATHOS PACK」を立ち上げたのは2007（平成19）年ですが、その前から舞台を作り続けて30年以上になります。これまでにダム建設のために奥多摩湖に沈んだ村人たちの話や従軍慰安婦の話などを取り上げました。その後も自殺やホームレス、あとは幼少期に広島で暮らした経験があり、原爆に関する作品も5つほど手掛けています。そして『永遠ノ矢¹』の前作は沖縄戦の集団自決を題材にしたのですが、書き留めているノートを見返すと、基地問題などについての芝居を書きたいと最初に思ったのは8年前のことでした。知れば知るほど沖縄の問題は複雑で、なかなか書けなかつたんだと思います。僕は強い人間ではないので、30年とか30作目という節目ということもあり、「今、書かなきゃ一生書けないぞ」という思いで、なんとか書き上げ上演できました。その

時ふと「次はアイヌの話を書いてみようかな」と思えたんです。自分の中には弾圧や搾取、偏見と差別を受けてきたアイヌ民族の血が流れていますので、この問題をずっと避け続けるわけにはいかないと。

町 同胞を傷つけてしまったことでアイヌの作品を書けなかったのは、裏返せば宇梶さんはそのことを忘れずに考え続けてきたということだと思います。劇場版を拝見しましたが、宇梶さん演じる「トワ爺」がアイヌ語さえ知らない若い世代に「自分で考えろ」と語りかけているのが印象的でした。

宇梶 僕が演じている役は叔父がモデルで、「馬鹿、馬鹿」と言われているのが僕自身です（笑）。叔父の浦川治造²は、東京でアイヌそのままの暮らしを送っている人で、常にアイヌ文様の入った裃^{けん}纏を着ていました。

町 荒れていた高校時代にも叔父さんに諭されたそうですね。

宇梶 芝居の中にも出てきますが散弾銃を突き付けられて「アイヌは人には迷惑をかけない。ここで撃たれるか、北海道で働くか、選ばせてやる」と言われました。当時の僕は、内心の恐怖を隠していきがっていましたが、選

択肢は一つしかありませんでした。あと我が家には叔父が素手で捕まえたという鹿の角がありました。「素手で鹿をどうやって捕まえるの？」って聞いたところ、冬の山は雪で真つ白だから茶色い鹿は目立つので追いかけていくと。命がけで逃げる鹿をこっちも必死で追っていき、鹿が疲れて動けなくなつたところでガツてやるんだと。しかも1日に2頭捕まえたのは俺だけだって自慢していました。嘘偽りのない人で本当に豪快です。

●人間（アイヌ）とは

町 迷惑をかけないためにはどうしたら良いのか自分で考えろということなんですね。

宇梶 そうです。「考えろ」しか言わない人でした。「トワ爺」の「トワ」は永遠と問い続けるという意味を重ねています。実は自分は若い時から「恋人とは」「親友とは」と必ず「トハ」をつけて相手を見つめるのが習慣でした。面と向かって言葉にすると気恥ずかしいですが、もし夫婦になつたとしたら「夫とは」や「妻とは」など、人との関係だけでなくさまざまな場面で、自分はどうするのがいいのかと考え続けています。

町 私はヤングケアラ当事者

* 1) 「永遠ノ矢=トワノアイ」 <https://towanoai.com/>

* 2) 劇団「PATHOS PACK」 <https://pathospack.com/>



の一人でしたが、これまで生き辛さを抱えた人たちを沢山取材してきましたし、その人たちの声を届けることが使命だと思っています。ですが宇梶さんと同じように知れば知るほど正しく伝えることの難しさに直面し、正しいことを声高に叫ぶだけでは伝わらないということも痛感しています。

宇梶 自分で色々なことを学んで知って理解していく作業に終わりはありません。棘やガラスが刺さっても人間の身体は自然と異物を排除するようになっています。人を傷つけてしまった時、その痛みを意識して抱えていかなければ、居るだけで人に悪いものを感じさせたり与えたりする人間になってしまうこともあります。生き辛さを抱えている人たちと向き合う時に、自分自身の思考や感覚を鈍らせないよう、淀ませないようにしたいと思っています。金八先生ではないけれど、「人間とは」人と人の間で生きる存在で、お互いに見つめ合うことで大切なものを与えられているのだと思います。その意味で人であると思えた時に柔らかいものや温かいものを実感できるのかなと。アイヌは「人間」という意味ですが、何ともいえない安心感があります。動物である

人間が優しさや温もりを手放してしまうと、強い者が弱い者を虐げますし、人は獣になってしまふ。だからこそ「人間」は状態のことではなく心の在り様や精神のことを表した言葉なんだということに気付くことが必要です。

町 「人とは」を考えさせられる深いお話です。アイヌは文字を持ちませんが、多様な言葉を持っていますね。

宇梶 その通りです。実はアイヌの若い世代もそう考えている人がいますが、言葉にカムイ（神）が宿っているからこそ言葉は大事なんだということを知ってほしいです。例えば挨拶で使われる「イランカラプテ」は「貴方の魂にそっと触れさせて下さい」という単なる挨拶を超えた深い意味があります。大切な人に大切なことしか伝えなかつたので文字は必要なかったのです。また昔から言われていることですが、文字はいくらでも改ざんできてしまうので、アイヌでは口承によって歴史も含めて伝えられてきたのです。

●ウタリとの暮らし、叔父の教え

町 お母様の静江さん*4はアイヌ復権運動の先駆者的存在ですが、

子どもの頃はどんな風を感じていましたか。

宇梶 実は我が家は離散家族でした。母親はアイヌの活動に身を投じていましたのでほとんど家にいませんでしたし、父親は母親の活動に理解がありましたが、建築の仕事をしていて忙しく家に帰って来ない人でした。放任主義というよりも僕と姉は放置された状態で、両親が家にいないのに母を頼ってきたウタリがずっと住んでいたので、今思えば他に行く所がないから身を寄せていたのですが、理解するにはあまりにも幼な過ぎました。自分の家だけ明らかに違っていて不安でしたし、親から愛されていないという疑いや捨てられたのではという怒りなどの複雑な思いが入り交じり、マイナス思考に包まれた少年時代でした。

町 有望な野球選手だったのに高校を中退し、暴走族の総長になったこと。少年院に入っていた時に母親から差し入れされたチャップリンの伝記が俳優を志すきっかけになったという話はこれまでも聞いていますが、そんな波瀾万丈な人生の中で、叔父さんの存在は大きかったですね。

宇梶 北海道で究極の選択を迫られました。叔父はそのあと上

* 3) 浦川治造さん：東京アイヌ協会名誉会長。宇梶剛士さんの叔父で、母・静江さんの実弟。アイヌのエカシ（長老）として、民族の精神性をたたえる儀式を日々の生活の中で続けている。ドキュメンタリー映画『カムイと生きる』でその半生が描かれている。

・浦川治造祈念館 <https://makikocoffee.wixsite.com/makikoland/浦川治造祈念館>

・映画『カムイと生きる』 <http://www.kamuytoikiru.com/>





舞台『永遠ノ矢=トワノアイ』
劇場版ポスター

京し土木工事の請負の会社を始めました。自分は少年院を出た後に俳優を目指しながら高校に行き直しました。明治大学付属中野高校の定時制です。バスケットに入り大会の成績次第では推薦で大学に入学できるチャンスもあったのですが、俳優の仕事が忙しくなるからと断りました。ですが簡単に売れるわけはなく、大学3回行けたくらい叔父の工事現場で泥だらけになつてずっと働いていました。現場で火を跨いだり、川を汚した時に叔父にはすごく怒られました。そんな叔父の下では学歴もなく差別を受けてきたアイヌの同胞が働いていましたが、差別を受け続けると次第に心が壊されて行きます。お酒に逃げてしまつたり、コミュニケーションが上手くできないから仕事が長続きしないという人が少なくありませんでした。最初は「だらしない弱い人は敗者で人生

の負け組」みたいに見えていました。これは中高生がホームレスを襲つたりするのと同じ思考で、そこに自分の未来がよぎるから憎くなるということ。自分もそういう気持ちで見ていることにハッとさせられました。もしかしたらその人を自分は下に見てるんじゃないか、じゃあ上と下つて何だとか……。

町 簡単に成功しなくて良かったのかもしれないね。

●社会課題や人の痛みを伝える

宇梶 一つだけはっきり言えることは、泣いてもわめいても過去には戻れないということですね。今を生き、未来を歩むのならば、失敗した過去を何らかの糧にできるように見つめないと。世の中がこうなればいいという自分の理想の気持ちがあつても、そうならない現状を見ると苦しくなりますよね。例えばロシアによるウクライナ侵略のニュースもずっと続くくと、時々違うチャンネルに替えたくなりませんが、そんな程度なんです自分も。でも何もできなくてもせめてニュースで伝えられていることを見なければ、この人たちの存在がないことになってしまう。

町 舞台でも「もっと考えろ」

という言葉以外にも、「見ようとしなければ見えない」という問いかけがありました。「見ようとする」ことが大事だというのもアイヌの問題だけじゃなくて全てに通じると思いました。演劇は世界や社会が抱える課題や人の痛みを伝える重要なツールだと感じます。

宇梶 子どもの頃、親に連れられてシンポジウムや講演会に行きました。もちろん専門的な話やデータなどもとても大切だと思いましたが、自分は気が付けばエンターテインメントの世界に入っていました。元々チャップリンの映画が好きでしたが、放浪紳士が主人公の映画では、自分も弱者なのに誰かを守ろうとする姿がユーモアを交えて描かれています。自分の作品の感想で「多いのが「すごく勉強になった」というもの。自分としては青春群像劇を作っているつもりですが、芝居は目と耳とハートの全身で感じてもらう営みなので、直接は言われませんがそういう重さを渡したんだなど。骨太なテーマでもチャップリンのようにエンターテインメント性も追求していきたいです。

●自分ならどうする

町 アイヌの人たちが置かれて

* 4) 宇梶静江さん：詩人、アイヌ古布絵作家。アイヌ復権運動の草分け的存在。
・映画『大地よ！～アイヌとして生きる～』<https://taiiproject.wixsite.com/daichi>

* 5) 北海道旧土人保護法：1899（明治32）年制定。1997（平成9）年5月の「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（アイヌ文化振興法）成立に伴い廃止された。



いる状況や環境は変わったのでしようか。

宇梶 明治政府が「北海道旧土人保護法」*5を作ったことにより、アイヌは住むところを追われ言葉や文化も禁じられました。文化と一言でいうけれども「生きることそのもの」じゃないですか。日本を含めて世界的に先住民族との共生を進めようという政策が取られてはいますが、権利回復はなされてない。「150年経っちゃったから難しい」とは子どもでも言えます。舞台の台詞にもありますが「『現実的に』や『難しい』という言葉を使うんじゃない」と。

町 大人は特に言いがちですね。**宇梶** 難しく簡単ではないことに取り組むことに意味や価値があるのだと思います。男女平等やLGBTQの問題も同じです。口先だけでなくみんな真剣に考えて変えていかないと。きちんと議論し行動する人がいない限り、人権後進国である日本の恥ずかしい現状は変わらない。「人間が人間にどうしてあんなことをしたのか」「分らない」というやりとりを舞台でしていますが、殴られた相手に握手されて「悪かったよ」と言われても「こちらの怪我はまだ治ってないんだけど」という状況です。人権を奪われた側は痛みを

決して忘れません。ただ、階段は一段一段上っていかなければならぬ。5段ずつ上がれば進むのは早いかもしれませんが、必ず置き去りにされる人がいるということも忘れてはなりません。

町 いじめも同様で加害者側は忘れてしまうことがありますね。**宇梶** 人の痛みや哀しみなどを忘れることが当たり前の社会は怖い。この思考は個人に必ず還元されて、そのように生きてしまいがちになっていく。人は簡単に忘れることがあるということも含めて学ぶことは、人として「居続けられるために何より大切なことだ」と思います。「もし自分だったらどうする」ということを前提に話せない人の話は、政治家を含めて全く意味を持たないということをやや早く知っていかないと今よりもっと乾いた国になってしまっていると思います。

町 「もし自分だったら」という問いかけを一人一人が常にしていけば、世の中は少しずつ変わっていくのではないのでしょうか。現在、宇梶さんは「民族共生象徴空間（ウポポイ）」のアンバサダーを務めています。次の世代にどんなことを伝えたいですか。

宇梶 アンバサダーになって多くのウタリに会うことができまし

た。これからもアイヌの良い所や文化、そして精神的なものを考えて豊かにしていければと思います。これはアイヌの中でもそうだし、この日本でも、アジアでも、世界中で、そこに生きている自分や一人一人がきちんと自覚して、人から頂いたものを大切に、古ぼけないように手入れしながら、それを丁寧な次の世代に手渡していきたいです。同時に、過去にあったことを自分たちの中でもなかったことにしないようにしたい。奪われた側は痛みを忘れないので共生は簡単ではないという話をしましたが、知らない人と共生はできません。アイヌについて知ろうとしてくれることが共生に繋がり、ひいては居心地のいい地域や世界になっていくと信じています。



●民族共生象徴空間
(ウポポイ)

<https://ainu-upopoy.jp/>



*後記 宇梶さんの母・静江さんが「ウタリたちよ、手をつなごう」と新聞に投稿し反響を呼んだのは1972（昭和47）年のこと。そんな母の姿を追ったドキュメンタリー映画『大地よ！～アイヌとして生きる～』のナレーションを担当したと照れくさそうに話してくれた宇梶さん。親子で共に過ごした時間は短くとも“アイヌの心”は確実に受け継がれています。「もし自分だったら」という問いかけを私自身もこれからも大事にしていきたいと思います。